

（もっけの心）

里山保全活動へのいざない

～

市川 貴大

高原山から高原山麓を望む

はじめに

里山は落葉・落枝や草，薪，炭，木材などを利用するため，人々の手入れにより成り立っている林(自然)のことです。その里山は1960年代以降，燃料・肥料革命や貿易自由化などの影響により存在価値が大きく失われ，管理も行き届かなくなりました。そのような背景の中，遠くにある貴重な自然の開発に反対する運動に加えて，身近な自然を守る運動が盛んになり，1980年代後半には開発に抵抗するだけでは里山を守ることができないことから，里山の保全活動へと発展しました。そして現在では，里山からの資源を継続的に利用していく，すなわち，里山の再生に向けた試みが行われるようになっていきます。

そこで本別冊では，多くの皆様方に里山保全活動に参加していただくきっかけづくりとして，各種団体で実施されている研修や講座，取組み等の事例を中心に紹介いたします。

(里山保全活動へのいざない ～ は季刊誌「しもつけの心」No.12～20，22にて連載されたものです)



里山整備後



里山整備前

目 次

はじめに	1
目 次	2
里山保全活動へのいざない 農林業ボランティアに期待	3
里山保全活動へのいざない 農林業ボランティア関連の資格に挑戦	5
里山保全活動へのいざない 農林業ボランティアに参加してみよう	7
里山保全活動へのいざない 農林業ボランティア 講習会で貴重な体験	9
里山保全活動へのいざない 農林業ボランティア育成へ 研修や実習のまとめ	11
里山保全活動へのいざない 口で語るより行動こそが重要 「高原山の自然を守る会」を設立 和気辰夫さん(上)	13
里山保全活動へのいざない 自然の中での交流空間 星ふる学校「くまの木」の立上げに尽力 和気辰夫さん(下)	15
里山保全活動へのいざない 高原山の山開き(登拝祭)を復活 和気達郎さん(上)	17
里山保全活動へのいざない ボランティアで高原山の登山道を整備 和気達郎さん(下)	19
里山保全活動へのいざない くまの木里山応援団設立への思い 遠藤正久さん	21
～高原山～高原山山開き登山ルート	23
星ふる学校「くまの木」里山マップ	25
おわりに	27



ボランティアによる散策路整備

里山保全活動へのいざない
〜スキルアップ編〜

農林業ボランティアに期待

市川 ^{たか ひろ} 貴大

平成16年から塩谷町にある宿泊体験型交流施設『星ふる学校「くまの木」』の農林業体験活動に自主的に参加してから5年が経過しました。そして平成20年から遠藤正久理事長の発意により裏山の整備を行うことになり、私は元々経験が乏しいものの、前向きに活動に参加しています。現実問題として、わが国の農山村地域では高齢化や過疎化が急激に進行しており、農林業の担い手不足が深刻になりつつあります。このような担い手不足の状態の中で、農山村地域では農林業ボランティアも期待されていることの1つです。しかし、国民の多くは農林業体験に関心はあるものの、実際に農林業ボランティアとして活動される方は少ないといわれています。そこで本連載では、私の体験を通して農林業ボランティアに参加する意欲を高める様々な講習や研修等を実例で紹介することで、より多くの方々に農林業ボランティアにご参加いただくことを目標にしております。

荒れる農地に近い森林

栃木県における農山村地域の振興

という仕事に従事して5年目になりました。農山村をめぐる「荒れつつある」と特に農地に近い森林が「荒れているなあ」と感じます。実際、農家林家の方にお話を伺うと、多くの方が「黒木（スギやヒノキなどの植栽木）を植えたのは失敗だったなあ」とか、「森林の手入れをしたら赤字だからやらないんだ」などとおっしゃることが多いです。確かに現在は1000以上の森林を所有しなければ森林経営が成り立たないといわれているように、一般的には農家林家では規模拡大は難しいばかりか、森林の手入れを行うことも困難な状況となっています。

このような林業不振の中、わが国では20世紀の後半、森林を有機的な生態系と捉え、木材生産だけでなくその多面的機能を保全すべきとする「持続可能な森林経営」の考え方が広まりました。このことを背景に、林業基本法や森林法が改正され、国有林・民有林ともに目指すべき森林整備の推進方向を「水土保全」「森林と人の共生」「資源の循環利用」の3つの重視すべき機能に絞ったゾーニングが導入されました。ただし、



21世紀林業創造の森での間伐体験
(写真提供 = 川上晴代・栃木県環境森林部主査)

前記3つの機能のうち「森林と人との共生」を選択した森林(民有林)所有者は1割未満と国有林に比べて低迷しているのが現状です。現在、これらのような政策がとられているわけですが、農山村地域では高齢化や過疎化が急激に進行しており、農業や林業の担い手不足が深刻になりつつあるため、森林の荒廃は後を絶たない状況です。以上のような担い手不足の状態の中で、期待されてい

るのが、広い意味での農林業ボランティアです。もちろんボランティアだけでは森林荒廃の根本的な解決策にはなりません、現在各都道府県で導入・検討されている森林(環境)税などといった独自課税は、森林環境の保全や森林を県民で守り育てる意識の醸成などを目的としており、今後ボランティアの役割はさらに重要になるものと考えられます。

私自身、以前からハイキングが好

きて農林業ボランティアに関心がありましたが、大学時代までは参加する機会がありませんでした。このため社会人になってから様々な研修や実習などに積極的に参加することにしました。といいますのも、森林・林業体験は農林業に比べ危険性が高いため、いろいろな団体で実施されている研修や実習などに参加する必要性を感じたわけ

です。そこで本連載を通じて、様々な研修や講座等を紹介していくことで、より多くの方々に農林業ボランティアに参加していただくきっかけになれば幸いです。

森林を活用し人材育成

行政での事例

各都道府県や一部の市町村では、森林ボランティアの育成のための研修や講座等を実施しています。私は平成17年に栃木県主催の森林ボランティアを育成するための研修や講座等に参加しようと思い、栃木県のホームページをこまめに閲覧していたところ、期間限定で「森づくり体験講座」(現在は「とちぎ森の楽校」を募集していましたので申し込みました。

「森づくり体験講座」は定員20名で、年5回の講座に原則参加できる方を対象に、森林整備(下刈り、間伐、枝打ち)に関する講習と山林内での実技を行い、多様な林業担い手の育成を図ることを目的に毎年実施されています(現在は各講座選択制)。

この年の参加者は20名で、1名は

県外からの参加でした。実施場所は鹿沼市にある21世紀林業創造の森というところで、ここは人里から離れており、林道の幅員が狭いなど交通アクセスが悪いため、通うのに思ったより苦労しました。参加者の過半数が60歳を超えており、全員男性でした。やはり森づくりに関心があるのは男性のほうが多いようです。受講料はありがたいことに基本的に無料です。午前中は講習、午後が実技で、コンパクトに森林整備について理解できる講座でした。やはり行政が主催ということで、安全には十分な配慮がなされており、安心して受講できるため、「森林ボランティアに関心を持っているものの体験したことがない」という方には特にオススメです。1つ注文をつけますと、安全面に非常に配慮しているために、どうしても堅苦しい雰囲気になる傾向がみられることから、「もう少しユーモアを交えて実施しても良いのでは……」という印象を持ちました。

(農学博士、とちぎ農林倶楽部部長

くまの木里山心援団团长)



JA全国教育センター周辺の森林での模擬ガイド

里山保全活動へのいざない
〜スキルアップ編〜

農林業ボランティア 関連の資格に挑戦

市川 ^{たか ひろ} 貴大

本連載では、農林業ボランティアに参加する意欲を高める様々な講習や研修等を実例で紹介することで、より多くの方々に農林業ボランティアにご参加いただくことを目標としております。

森林を活用し人材育成

財団法人での事例

農山漁村の景観やその地域ならではの体験を楽しむ余暇活動(グリーン・ツーリズム)が注目を集めている中、地域を訪れる人々にその地域を案内したり、地域ならではの体験を指導する「地域案内人」や「体験指導者」が重要となっていることから、(財)都市農山漁村交流活性化機構ではグリーン・ツーリズムインストラクター育成スクールを実施しています。グリーン・ツーリズムインストラクター育成スクールは地域案内人を育成するエスコーター、体験指導者を育成するインストラクター、企画・運営力に磨きをかけるコーディネーターコースの3コースが

あります。筆者は2005年のインストラクターコースに参加しました。

インストラクターコースは、年に3回開催され、3泊4日の合宿方式で、座学と実技を行った後、認定試験に合格すればグリーン・ツーリズムインストラクターとして認定されます(近年、開催回数は減っているようです)。グリーン・ツーリズムはわかるようでわからない言葉ですが、「農山漁村で楽しむ、ゆとりある休暇」体験学習をとまなう旅(財)都市農山漁村交流活性化機構2003)であると親切丁寧に説明していただきました。また、実技では畑や里山(町田市大沢をフィールドにして、畑や里山の自然や文化などについて、模擬ガイドをしたり、体験指導や活動を行いました。本講座の参加者は33名で、大学生から定年退職者まで男女問わず幅広い年齢層が参加していました。合宿方式で、夜中までグループワークを行うなど、グリーン・ツーリズム漬けの充実した4日間でした。ただし、



高尾山での森林観察

合宿方式で、参加費が5万円であることから、多少旅行感覚で楽しみながら参加されることをお勧めします。

本講座は、森林ボランティアの育成というよりは森の案内人の育成に近い感じで、他人を理解させるノウハウを短期間で勉強できるところが魅力で、特に初心者にお勧めです。

社団法人での事例
(社)全国森林レクリエーション協会では、森林インストラクターに必要な知識および技能を付与することを目的に、森林インストラクター養成講習を実施しています(全国林業改良普及協会 1992)。当講座は「森林」、「林業」、「森林内の野外活動」、「安全と教育」の4科目について座



熱の入った谷本先生の説明

の講義用テキストが用意され、往年の研究者たちが、かつての大学の講義のように熱弁をふるわれ、森林全般についてわかりやすく説明していただきました。また、森林の実技では高尾山にて宇都宮大学名誉教授の谷本丈夫先生をはじめとする森林インストラクターの方々の指導により、樹木を見ながら説明を受けることができました。

学を中心に実技も実施するもので、全教科を受講し、講習修了書の交付を受けたものは、森林活用ガイドの称号が付与されます。ただし、森林インストラクターに認定されるためには、当協会が実施する森林インストラクター資格試験に合格する必要があります。

当講習は科目別または全科目受講するコースがあり、5～8月に実施されます。各科目ごとに専用

森林インストラクター資格試験に合格するためには、当講座が最も適していると考えられます。ただし、実技については最低限にとどめてあるため、改めて勉強することが求められます。また、全科目の受講料は5万2千円で、それなりの覚悟と準備が必要になります。

(農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山応援団団長)

里山保全活動へのいざない

〜スキルアップ編〜



ヒノキ天然林の観察 長野県木曽赤沢自然休養林

本連載では、農林業ボランティアに参加する意欲を高める様々な講習や研修等を事例で紹介することで、より多くの方々に農林業ボランティアにご参加いただくことを目標にしております。

座学と実技で森林を理解する

NPO法人での事例

各地のNPO法人では森林ボランティアの育成のための研修や実習等を実施しているところがあります。しかし、これらの研修や実習等につ

いては、口コミやインターネット、地域情報誌など、各種情報源はあるものの、行政と異なり

農林業ボランティアに参加してみよう

市川 貴大^{たか ひろ}

情報入手が困難な場合が多いです。ただし、研修や実習等の内容は行政主催と比べて、アフターフォローまで含めて充実している傾向にあるといえます。

書籍やインターネットで調べたところ、森林や林業の実地研修を総合的に受けられる、NPO法人「やまぼつし自然学校」を発見しました。NPO法人「やまぼつし自然学校」の森林インストラクター養成講座は東京会場と長野会場が用意されています。私は「とちぎ農林倶楽部」の星野さんとともに、三月〜七月にかけて東京会場、八月〜十一月にかけて長野会場に出席しました。

当講座は(社)全国森林レクリエーション協会が実施する森林インストラクター資格試験に準じる形で、森林、「林業」、「野外活動」、「安全と教育」の四科目について、座学と実技を組み合わせて行うことに大変意義があるといえます。座学については大学の集中講義に近いもので、興味のない事項についてはどうしても頭に入らないことが多いです。それに対して、実技は理論の一部分しか行うことはできませんが、うる覚え

にしても長く覚えていることが往々にしてあります。つまり、人間は頭でつかちではためであり、実践をともなわなければならぬように、当講座は的を射ているといえます。特に印象に残っているのは、当時の代表理事であった毛受俊郎さんの巧みな話術でした。毛受さん夫妻は東京の小学校で先生をなされていたが、退職され、「やまぼつし自然学校」を立ち上げられました。毛受さんのお話を聞いていると、これまで「苦労された努力が滲み出ているようでした。

当講座の参加者は東京会場だけでも四十名おり、男女問わず幅広い年齢層でした。講座の第一回目には自己紹介のほかにアイスブレーキングも行われ、主催者および参加者が一体となって勉強することができました。当講座が終わっても連絡を取り合ったり、NPO法人の活動に参加されている方もおり、生涯学習としてもお勧めできます。受講料金は十九日間で五万円程度です。

二〇〇六年に、各都道府県にご協力をいただき、NPO法人による森林ボランティアの育成のための研修



きのこ談義をする毛受俊郎代表理事(当時)

尾瀬山林塾で間伐体験

任意組織での事例

任意組織(法人格を有しない組織)

でも森林ボランティア育成のための研修や実習等を実施しているところもあります。ただし、一般的に任意組織では賛同するメンバーを中心に活動していますので、情報収集はNPO法人よりも困難といえます。私は二〇〇六年の春、中山間地域振興の一環として遊休農地での大豆の栽培とその加工を検討していましたところ、塩谷町上寺島

や実習等の情報提供を呼びかけたところ、十五都府県で実施されていることが分かりました。実際にはもつと存在していると考えられ、ぜひ皆さんもお探しいただけたらと思います。



伐採指導する塩田事務局長

地区住民の方から、群馬県片品村で既に実施しているとの情報をいただいたので、休日にくわさの豆腐を買いに行きました。後日視察した豆腐屋(尾瀬ドーフ)さんのホームページを閲覧したところ、島崎山林研修所尾瀬山林塾というグループの存在を知りました。尾瀬山林塾は地元の組織「さんぞうぼうしの会」が主催、山林の施業診断や間伐・枝打ちなどの必要な技術を学んでもらうため

に、八月を除く五月〜十一月の第二土曜・日曜の計十二日間、通年講習会を実施しています。私は親友の長谷川福造君と二〇〇六年十月に見学に行き、一日間伐体験をさせていただきました。

尾瀬山林塾の入会条件は特になく、入会金一万円のみで、年会費は無料とのこと。指導者は地元山の作業に精通している方であり、間伐や枝打ちなどの森林整備を心ゆくまでやりたい方にはお勧めできます。このような活動を実施している任意組織は全国にも存在していると思われるので、参加したい地域の森林関係の仲間から情報収集することも一つの方法であるといえます。

(農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山心援団団長)

本連載では、農林業ボランティアに参加する意欲を高める様々な講習や研修等を実例で紹介することで、より多くの方々に農林業ボランティアにご参加いただくことを目標にしております。



北海道大学演習林内でバス故障時の集合写真

農林業ボランティア 講習会で貴重な体験

市川 ^{たか} 貴大 ^{ひろ}

里山保全活動へのいざない
〜スキルアップ編〜

フィールドで森林を理解する

筆者は1998年から東京農工大学草木演習林(現在フィールドミュージアム草木)のフィールドをお借りして森林の物質循環(養分動態)を研究しています。1998年に草木演習林の宿泊棟にて偶然北海道大学主催の「野外シンポジウム1998 森をしらべる」参加者募集のポスターを見て、ただちに一人で参加することを決めました。

このシンポジウムは全国の大学・大学院生を対象に、森の中で研究成果を勉強しようという北海道大学で初めての試みで、3泊4日で実施されました。

参加者は抽選で25名が選ばれ、そのうち19名が女性でした。北海道大学の演習林にて朝から夜まで、森林漬けの日々を過ごしました。志を共にする全国から集まった学生たちと情熱的で熱心な教員や技官の方々にかこまれて共に勉強できたことは、生涯忘れることのできない貴重な体験でした。

冬期には参加者有志により自主的に北海道大学演習林にて森林勉強会

を開催し、こちらも大変貴重な体験や勉強をすることができました。シンポジウムの内容については笹・柴田(1999)、植村・柴田(2000)に詳しく記載されています。

なお、現在でもこのシンポジウムは継続されており(北海道大学北方生物圏フィールド科学センターホームページ参照: <http://forest.fsc.hokudai.ac.jp/yagai/>)、参加費は1万5千円と低価格に設定されています。森林に関心のある学生の皆さんにはぜひ参加してほしい講座の一つです。

各大学では現在、生涯学習や地域貢献などを目的に様々な「公開講座」を実施しています(例えば東京農工大学演習林 1999)。関心のある方は、最寄りの大学の公開講座を調べてみてください。

ちなみに、栃木県では栃木県緑化推進委員会と宇都宮大学が連携して、「グリーンスタッフ養成講座」を宇都宮大学船生演習林にて実施しています。「グリーンスタッフ養成講座」は一般参加OKで、参加費は無料ですので、こちらの講座もお勧めします。



「伐木等業務」講習での実習

チェンソー・刈払機を理解する

協会での事例

森林ボランティアを実践する時に、木材を伐採するためのチェンソーや下草を刈るための刈払機といった機械を使うことも多いですが、これらの機械は使い方を誤ると人身事故につながってしまうこともあります。

そこで、各都道府県に支部を持つ「林業・木材製造業労働災害防止協会」では、林業と木材製造業の作業者が安全で快適に働けるように「伐木等業務(チェンソー)」と「刈払機取扱作業教育」などの技能講習を実施しています。近年ではこれらの講習会に森林ボランティアの参加も多くなっているというところで、「伐木等業務

(チェンソー)」と「刈払機取扱作業教育」の講習についてご紹介しましょう。

「伐木等業務(チェンソー)」は学科8時間と実習8時間の2日間の講習で、非会員の参加費は1万6千円です。この講座の魅力はソーチェン(チェンソーの刃)の目立てと伐採について実習しながら、専門の講師から直接コメントをいただけることです。また、参加者のほとんどは実際に伐木等業務をこなされている方ですので、チェンソーの使い方を間近に見られる良い機会でもあります。

「刈払機取扱作業教育」は学科5時間と実習1時間の1日の講習で、非会員の参加費は9千5百円です。下草刈りの実習では、講師から直接コメントをいただけるので、刈



「刈払機取扱作業教育」講習での実習

払機の使い方が良くわかります。

ちなみに「伐木等業務(チェンソー)」と「刈払機取扱作業教育」の講習終了後には、「修了証」が発行されます。チェンソーや刈払機を使って森林ボランティアをやりたいという方には受講をお勧めしたい講習の一つです。

(農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山心援団団長)

本連載では、農林業ボランティアに参加する意欲を高める様々な講習や研修等を実例で紹介することで、より多くの方々に農林業ボランティアにご参加いただくことを目標にしております。

農林業ボランティア育成へ 研修や実習のまとめ



市川 ^{たか ひろ} 貴大

里山保全に関心のある方々に少しでも農林業ボランティアに参加していただけることを目標に、行政、各種法人、任意団体、大学、協会などの様々な分野での森林などを活用した人材育成について連載してきました。連載で紹介した様々な団体での農林業ボランティアの育成のための研修や実習等について表にまとめて示します。

主催する行政、各種法人、任意団体、大学、協会などの様々な団体により、研修や実習のねらいや実施方法等が異なることがわかります。行政主催の研修や実習等については、目標が明確でかつ格安で参加できる利点がある一方で、募集人数が少ないことや、都道府県の中には受講後にボランティア参加などといった社

里山保全活動へのいざない
〜スキルアップ編〜

様々な団体での農林業ボランティアの育成のための研修や実習等について

分類例	研修や実習名	実施主体	募集期間	実施期間	参加費	実施場所
行政	森づくり体験講座	栃木県	5月	6～11月	6,000円程度	21世紀林業創造の森(栃木県鹿沼市)
財団法人	グリーン・ツーリズムインストラクター育成スクール	(財)都市農山漁村交流活性化機構	随時	年3回程度	50,000円	JA全国教育センター(東京都町田市)等
社団法人	森林インストラクター養成講習	(社)全国森林レクリエーション協会	4月 6～7月	5～8月	14,000～ 52,000円	三会堂ビル9階 石垣記念ホール (東京都港区)
NPO法人	森林インストラクター養成講座	NPO法人やまぼうし自然学校	随時	3～11月	14,000～ 52,000円	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)、長野県各地等
任意組織	尾瀬山林塾	さんぞうぼうしの会	随時	5～11月		群馬県片品村の山林
大学	野外シンポジウム・森をしらべる	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部	(大学内のポスター参照)	8月	15,000円	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
協会	伐木等業務(チェーンソー)刈払機取扱作業教育	林業・木材製造業労働災害防止協会	随時	年8回程度	16,000円 9,500円	栃木県林業センター(栃木県宇都宮市)

各都道府県では各種研修や実習を開催しています。詳しくは「野外教育研究」Vol.12 35-43p.をご参照ください。

会貢献を求めることもあります。財団や社団法人主催の研修や実習等については、主に資格の取得を目標とするものであり、確立された力リキコラムが用意されています。

NPO法人主催の研修や実習等については、それぞれのNPOの組織力の違いや、理念は高いものの、財政や人材的な問題により、実施内容に多少のむらが生じる可能性があります。



くまの木里山応援団（毎月第3日曜日に気ままに活動中）

ます。これらの点を理解して受講すれば満足できると考えられます。任意組織主催の研修や実習等については、任意組織の概要を理解しなければ参加しにくいという欠点がありませんが、機会があれば、まず電話や郵便、Eメール等でいろいろ質問することを勧めます。

大学主催の研修や実習等については、各大学により実施内容や募集対象が異なるため、各大学のホームページを閲覧して確認してから、各担当にEメール等で質問するのが良いでしょう。協会主催の研修や実習等については、各都道府県にある支部が同一内容で実施しています。ぜひ受講しておきたいものです。

様々な団体での農林業ボランティアの育成のための研修や実習等についての共通の問題点として、情報収集の困難さが挙げられます。このことは農林業ボランティアだけでなく、グリーン・ツーリズムなどといった都市農村交流による地域振興等の問題点でもあります。毎年講座を受講してわかったことは、受講すれば必ず様々な人々との出会いや新しい発見があるということです。特に

人々と出会うことで、いろいろな情報を聞くことや新たなつながりができます。

例えば、NPO法人「やまぼうし自然学校」主催の森林インストラクター養成講座に参加したところ、神奈川県や東京都が主催する森林インストラクターを育成するための研修や実習に参加した時の話を聞くことができました。

また、栃木県主催の森づくり体験講座の参加者の有志は昨年から活動を開始した「くまの木里山応援団」設立の母体となっています。北海道大学の野外シンポジウムに参加してから十年以上が経過していますが、いまだに柴田英昭准教授とお会いするとありがたいことに励ましのお言葉をかけていただいております。

里山保全活動に関心を持たれている方は、ぜひ様々な団体での農林業ボランティアの育成のための研修や実習等に参加してみてください。きっと様々な出会いや収穫があることでしょう。

（農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山応援団団長）



高原山から見た高原山麓



矢板側から見た高原山

口で語るより行動こそが重要 「高原山の自然を守る会」を設立



「行動こそが重要」と話す和気辰夫さん

和気 辰夫さん(上)

本連載では、農林業ボランティアに参加する意欲を高めることを目的に、～まではスキルアップ編をご紹介します。からは高原山の保全活動を精力的に実施されている人生の先輩から学ぶ企画とし、貴重なお話を元に文章化しました。

高原山は「たかはらやま」あるいは「たかはらさん」と呼ばれており、栃木県北部に位置し、北部の明神岳、前黒山、および南部の釈迦ヶ岳、西

里山保全活動へのいざない
～人生の先輩から学ぶ編～

平岳、鶏頂山、剣が峰などからなります。歌人の与謝野晶子さんも東北本線で旅をした時、車窓から眺める山の中で一番美しい山だと賞し、いくつかの高原山にちなんだ歌を詠むなど、矢板市民や塩谷町民のシンボルにもなっています。

高原山の保全活動について

釈迦ヶ岳(標高一七九四・九)は地元の守り神を祀っている「霊峰」であり、かつては毎年四月八日の灌仏会(かんぶつえ)「釈迦の誕生日」の前夜、村の若者は守子神社に泊まり、翌朝山頂を目指した村全体の結束を固める儀式があったそうです。和気

辰夫さん(ハニ)は高原山の自然林(林業的には天然林のことですが、誤解を生じやすい言葉ですので自然林という言葉を使います)をはじめとする自然を愛し、隅々まで山を歩かれました。

しかし、高原山にも森林伐採の手がおよび、営林署が昭和五十八年から昭和六十年までの三力年での自然林の伐採を計画し、昭和五



高原山の中腹にはブナやイヌブナ、ミズナラなどの自然林がある



釈迦ヶ岳にて(2007年・高原山の山開き)

十七年から釈迦ヶ岳林道新設工事に着手され、自然林も伐採され始めました。当時の塩谷町長・柿沼尚志さんが中心となり、自然林を残すよう営林署に要望書を出しましたが、受

け入れられなかったという背景がありました。そこで、当時日本野鳥の会県支部長も務められていた和気辰夫さんが自然林の伐採中止を求めて塩谷町民を中心に仲間を募り、約七百人の規模の住民団体「高原の自然を守る会」を設立し、伐採現場の視察や営林署をはじめとする関係機関との話し合いなどの活動を展開されました。その後、東京の総合建設会社による採石事業計画に反対するた

高原山の保全活動のきっかけ

和気さんは、石川琢木が「一握の砂」で詠んだ山の歌「ふるさとの山に向かい 言うことなし ふるさとの山はありがたきかな」＝日常生活で積もった不平や不満がふるさとの山(の景色)を見ているだけで洗われ、もう何も残っていない。そこにあるだけで心を癒してくれるふ

るさとの山とは本当に大切なものだなあ(ホームベージより解釈抜粋)＝にあこがれて、農休日には高原山をくまなく歩きました。小学六年生の時には理科の先生が植物や石について教えてくれたので、高原山と一緒に歩いていくうちに自然に興味を持つようになりました。

その後野鳥の会に入会し、動物写真家と共にシカ狩りの撮影をするために、高原山を紹介した時に、文明に追われていく野生動物の哀れさを感じました。そのような中、朝日新聞と森林文化協会が「二十一世紀に残したい日本の自然百選」の募集をしていたので、高原山を推薦しました。残念ながら百選には選ばれなかったものの昭和五十七年十月十四日付け朝日新聞に高原山の記事が大きく掲載されました。

それからしばらくして、高原山の自然林が伐採されているという情報が入り、宇都宮大学の田中忠・藤原信先生方から社会運動が必要だと指



林道は自然林伐採後に植樹したヒノキ林が1部倒壊し、道をふさいでいた(2007年の高原山山開きにて)

摘され、「高原の自然を守る会」を設立するに至りました。

和気さんは「大覚寺(矢板市永井)も協力してくださり、署名運動してくれたことも大きかった。今思えば、自然保護活動はマスコミのおかげでもあったし、『守られる会』でした。やはり口で語ることより行動こそが重要ですね」と振り返る。

(以下次号)

(農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山心援助団長・市川貴大)



小鹿を助けた時の写真(平成10年5月)

自然の中での交流空間

星ふる学校「くまの木」の立上げに尽力

和気 辰夫さん(下)

里山保全活動へのいざない
～人生の先輩から学ぶ編～

和気辰夫さんは当時の思い出と未来への期待について次のように話しています。

高原山での保全活動の思い出

動物写真家と共にシカ狩りの撮影をするために、高原山を紹介したときに、小鹿がしゃがんでいました。これは足が骨折しているのではないかと疑われ、県民の森で治療してもらった方がいいと思い、抱きかかえて足の状況を診てみたところ特段悪そうではありませんでした。手を離れたところ小鹿は逃げていきました。これが擬傷きしょう動物が傷ついたふりをして敵をだますことなんだなあと思いました。

あとは尚仁沢の上流の権現沢を考古学の猪瀬先生と歩いていた時、ストーンサークル(石を環状に配置した古代の

遺跡がありました。ただ、その時はあまり関心がなかったので、大切な遺跡だと気がついた時には砂防工事でなくなっていました。今振り返ってみると、本当にもったいないことだったと思っています。

営林署とは何度も話し合いました。話し合いの中で、公開シンポジウムの開催を提案し、開催する計画も立ち上がりましたが、営林署がマスコミを意識して、シンポジウムの開催の代わりに、自然休養村で町長



名水百選に選定された尚仁沢湧水



星ふる学校「くまの木」。現在は「特定非営利活動法人・塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合」が滞在型の宿泊体験施設として管理している。

助役、県林務と話し合いをもつことになりました。その場で、営林署が「わかりました」とこれ以上伐採をしないことを明言し、以後「監視してくれ」と言われたときのことは、生涯忘れえない出来事でした。

未来に期待すること

「水をきれいにすること」です。名水百選に選定された尚仁沢湧水も一キロくらいはきれいですが、それから下流はあまりきれいではありません。『はーとらんど』にある給水スタンドに川下の方が年間二十万人

も水汲みに来るとのことですが、本来、川上側は「きれいな水を流すことがつとめ」であり、未来は川の水がきれいになればいいと思っています。

集落の近辺でもアブラハヤやツメ、ホトケドジョウなどがいましたが、今は見かけなくなりました。ホタルもヘイケボタルばかりになってしまいました。集落の中ではホタルは金にならないなどと言われますが、現在はお金がないと生活ができないという社会になっているような気がします。やはり環境は情緒がないと良くならないと思います。

和気さんの思いをつなぐ

私が中学生時代にお小遣いをためて購入した石川啄木の「一握の砂」をひっぱり出してきて、パラパラめくっていますと、解説として「石川啄木の人と作品」が記載されておりました。石川啄木は二十七歳でこの世を去られたのですが、十七歳で旧制中学を中退し岩手から東京に上京してから、十年の間に壮絶な人生を送られました。そこで二十五歳の時

に「一握の砂」が刊行されたわけです。和気辰夫さんが愛している山の歌には、石川啄木の苦難に満ちた生き様があつたからこそその思いが詰まっているのではないだろうかと感じました。

和気辰夫さんも子供のころから、高原山を愛し、隈なく歩き、自然に関心を待たれたことが、高原山の保全活動の原動力になっています。「口で語ることより行動すること」はまさしくその通りだと思っています。

また、和気辰夫さんは旧熊ノ木小学校が廃校になった時にも、中心となって今後も活用されるように活動され、現在やすらぎの交流空間として滞在型体験施設・星ふる学校「くまの木」として生まれ変わることができました。高原山の山開きの時にも代表を務められ、多くの人々に高原山の自然

の大切さを発信されました。現在、和気辰夫さんの所有林を一部利用させていただき、くまの木里山応援団活動を実施しています。今後とも微力ながら和気辰夫さんの思いをつなげながら高原山麓での保全活動をしていきたいと思っています。

(農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、

くまの木里山応援団団長・

市川貴大^{たかしろ})



くまの木里山応援団を温かく支援してくださる和気辰夫さん(中央)



高原山の山開き(守子神社)

高原山の山開き(登拝祭)を復活

和気 達郎さん(上)

里山保全活動へのいざない
～人生の先輩から学ぶ編～



高原山の山開きを主催される和気達郎宮司

前号および前々号では、高原山の自然を守る会を設立し、高原山の自然の保全活動を精力的に行われた故和気辰夫さん(今年8月12日逝去)の活動を紹介しました。今号では、高原山の登山道整備と高原山の山開きを精力的に実施されている高原山神社宮司の和気達郎さん(六〇)をご紹介します。

高原山神社の由来

高原山は奈良時代より山岳信仰の山として栄え、釈迦ヶ岳(標高一七九四・九)、中岳(標高一七二八)、西平岳(標高一七二二)の三山参拝は古来より「三関三度」の巡拝といわれ、過去・現在・未来を生きながらにして体験、新たな生命を宿として生まれ出る、よみがえりの信仰とされてきたといわれています。

明治以前は高原山三社大権現といわれていましたが、明治以降は高原山神社と称しています。高原山神社の主祭神は大国主命(大黒さま)、事代主命(恵比寿さま)、月読命(暦をつくつて農民に指示を与える神)で、摂社(本社に付属し、その祭神と縁故の深い神を祀った神社)には守子神社、鶏頂山神社があります。

高原山の

保全活動について

高原山神社の例祭日は旧暦の4月6～7日で、先代宮司のいた昭和30年代まで



山開きのフィナーレはおそば



高原山の山開き（釈迦ヶ岳）

は守子神社に社務所があり、前日守子神社に宿泊し、当日に登拝の安全祈願を行ってから山頂を目指す多くの登拝者でにぎわっていたそうです。しかし、近年までは登拝祭が途絶えていました。平成11年から平成14年にかけて、矢板市・塩谷町・藤原町（現日光市）、塩原町（現那須塩原市）の1市3町が合同で高原山山開きを実施していましたが、平成15年からは行われないことになりました。

私は実家の農業と宮司を引き継ぐために平成13年に会社を退職したのを機に、平成14年から登山道の整備（ササ等の下刈り）を開始しました。守子神社などの各お宮は木々に覆われ、登山道もササで覆いつくされていました。登山道については、過去に踏まれた足跡をたよりに下刈りを行いました。そして、平成15年から高原山神社の登拝祭を復活させました。

また、平成20年から塩谷町が町営バスを運行して協力していただき、「高原山山開き」という名称で毎年5月第3週の日曜日に実施しています（雨天中止）。高原山山開きの行

程は、まず守子神社で登拝者の安全祈願のお祓いを行います。その後、釈迦ヶ岳山頂で11時30分から登拝祭ということでお祓いをし、お札とお神酒を振舞います。今年は上寺島活性化施設を集合場所とし、山開き後、上寺島そば部会の協力でざるそばも振舞いました。

高原山の
保全活動のきっかけ

やはり「登拝祭」の復活です。登拝祭を復活するためには、まず登山道の整備（ササ等の下刈り）が必要なことになりました。釈迦ヶ岳への登山ルートは剣ヶ峰（矢板市）、守子神社・前山（塩谷町）、西平岳（塩谷町）、鶏頂山（日光市）の4つがあります。剣ヶ峰からのルートは矢板山岳会が整備しておりますが、他の3ルートは1市3町合同の高原山山開きが行われなくなってしまうのは整備されなくなり、現在は高原山神社で整備しています。

また、平成15年に塩谷町の柿沼尚



イヌブナ自然林

志前町長から守子神社周辺に広がるイヌブナ自然林を国の天然記念物になるよう文化庁に申請したいとの説明があり、平成18年に指定されました。イヌブナ自然林の国の天然記念物指定は大変うれしく、登山道の整備の励みになっており、登山道を利用される皆様方に四季折々の高原山の豊かな自然に接して欲しいと思っています。

（以下次号）

（農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山応援団団長 市川貴大）



登山道（釈迦ヶ岳と鶏頂山を結ぶ尾根筋）を整備する和気達郎さん

ボランティアで 高原山の登山道を整備

和気 達郎さん（下）

里山保全活動へのいざない
（人生の先輩から学ぶ編）

和気達郎さんは保全活動の思い出と未来への期待について次のように話しています。

高原山での保全活動の思い出

釈迦ヶ岳への登山道の整備は4月に枯れ枝等の除去、8～9月にササ等の下刈りなど、年10回程度行つて



御影石を人力で担ぎ上げた中岳の小祠

おり、一番うれしかったのは整備中に登山者から感謝の言葉をいただいたことです。登山者の中にはインターネットに高原山開きの情報を掲載してくださる方もいらっしゃる、ありがたく思います。また、整備中にカモシカやリスなどの動物にも遭遇し、ちよつとした「いやし」を提供してくれます。

一方、苦勞した思い出としては、昨年中岳・西平岳へ小祠を3人が人力で運び上げ建立したことですね。特に辛かったのは、中岳の御影石でできた40キロの台座を歩いて担ぎ上げた時です。10分歩いては休みをとりながら少しずつ担ぎ上げましたが、すぐ息切れして、なかなか前に進めない状況で、現地に到着した時には何ともいえない達成感がありました。また、登山道整備のためには、刈払機と燃料を背負つて釈迦ヶ岳山頂に行くのですが、これも容易ではありません。

登山道の整備を続けて感じることは、自然を守り続けることの大変さでした。「継続は力なり」を信じて、健康である限りは活動していきたいと思ひます。

未来に期待すること

今は廃校になりましたが、私が当時通学していた玉生中学校の校歌（作詞・石川暮人、作曲・武山信治）の一番には

高原山の山ふもと

荒川の水上清く

朝日輝く丘の辺の

遠き祖先みおやが開きし村に

築く文化の礎の

我等が玉生中学校

とあるように、生まれてから高原山を町のシンボルとして朝夕仰いできました。

特に釈迦ヶ岳から麓を眺めると、塩谷町の自然がいかに豊かであるか



玉生から望む高原山

一目瞭然です。高原山麓に暮らして

いる私は、高原山の豊かな自然の恵みに感謝するとともに、豊かな自然を後世へ守り続けていきたいと思えますし、また、多くの方々にも守ってほしいと思います。そのためにも多くの方々に高原山山開きに参加していただき、高原山の豊かな自然や、石仏等の文化にもじかに触れていただくとともに、少しでも山に対する信仰心を持っていただければと思います。

まとめ

私は平成19年から高原山山開きに参加していますが、登山道の整備には参加したことがありませんでした。



西平岳登山口付近に安置された姥神様

そこで、昨年9月11日に和氣達郎さんとともに登山道（旧鶏頂山スキ一場付近の登山口から釈迦ヶ岳・鶏頂山）の整備に同行し、ササ等の下刈りを行いました。刈払機と燃料を持参しての山登りと下刈り作業はまさしく修行そのものでした。高原山の登山道周辺は1メートル程度のササが群生しているところが多く、左右のササを刈払いながら登って行きました。

釈迦ヶ岳と鶏頂山を結ぶ尾根筋までは何とか整備作業をしましたが、釈迦ヶ岳に向かう急な上り坂は刈払機を持って登るのは辛く、密集しているササを刈払いながら体力の限界を感じて、4時間ほど経過してから下山しました。

和氣達郎さんは8時間ほどかけて予定のコースを刈払われました。作業当日に出会った登山者の皆さんは口々に、和氣達郎さんの地道で根強い活動に感謝の意を述べられておりました。私もササを精力的に刈払われる和氣達郎さんの姿を目の当たりにし、改めて誌面を通して敬意を表したいと思います。

やはりこういう作業はマンパワーが必要不可欠です。今後の課題として、登山道の整備は和氣達郎さんと

一部の協力者だけでなく、塩谷町内の自然を保全する団体等の有志や行政も参画していくことが必要なのではないかと感じました。

また、和氣達郎さんは奥さんの洋子さんと共に星ふる学校「くまの木」と、とちぎ農林倶楽部「主催の「パン小麦栽培 in 高原山麓」の農作業の指導者として協力いただいています。私たちと一緒に参加いただいており、大変恐縮ですが今後ともよろしくお願い致します。さらには平成21年から「高原山の自然を守る会」の副会長にも就任され、新たな活躍に期待したいと思います。

（農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、くまの木里山応援団団長

市川貴大）



パン小麦畑の耕うん作業



星ふる学校「くまの木」

「くまの木里山応援団」 設立への思い

遠藤 正久さん

「活動を企画し、実行する編」

里山保全活動へのいざない

本連載では、農林業ボランティアに参加する意欲を高めることを目的に、くまの木にはスキルアップ編、くまの木には人生の先輩から学ぶ編を紹介しました。からは里山保全活動を企画し、実行している「くまの木里山応援団」について連載していきます。

星ふる学校「くまの木」について

栃木県塩谷町立熊ノ木小学校は学校の統廃合の対象となり、1999年3月に124年の歴史に幕を閉じました。その後、地元から建物存続の要望の聲が高まり、1999年5月から旧熊ノ木小学校跡地利用検討委員会が開かれ、旧熊ノ木小学校運営委員会が協議した結果を踏まえ、農林水産省やすらぎの交流空間整備事業(交流拠点施設整備事業)により2002年3月に宿泊型体験施設として竣工しました。また、宿泊型体験施設の愛称が公募により星ふる学校「くまの木」に決定し、2002

年4月にNPO法人・塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合「星ふる学校「くまの木」」として営業を開始しました。理事長には都市農村交流ができる廃校を全国で探していた県外出身の遠藤正久氏が就任しました。宿泊者数は2002年度に1890人、その後年々増加し2009年度には4530人に上りました。宿泊者は県外が8割、年代も30代以下が8割を占め、主に合宿や研修の利用となっています。

星ふる学校「くまの木」の体験学習メニューは、自然観察体験、農林業体験、伝統工芸体験、文化体験、



昔ならではの広い木の廊下

験、郷土料理体験となっています。
また、会員制の非営利活動として「パン小麦栽培 in 高原山麓」や「くまの木自然クラブ」、「くまの木里山応援団」、「くまの木農林支援隊」などの活動も展開されています。

やすらぎ・癒しの場に

遠藤正久理事長に聞く

「くまの木里山応援団」設立への思いと将来の夢について、遠藤正久理事長にお聞きしました。

私は 木造の廃校を活用すること
廃校とその周辺をやすらぎ・癒し
の場としていきたいという思いが



「くまの木農林支援隊」＝簡易水道の手入れ

ら、星ふる学校「くまの木」の理事長に就任しました。やすらぎ・癒しの場づくりの一環として、まずは校庭の一部にビオトープをつくりました。その後、星ふる学校「くまの木」の裏山を散策したところ、マタタビが覆い尽くすなど敷の状況でしたので、裏山の手入れをしたいと思いました。

また、星ふる学校「くまの木」立上げ当初、旧熊ノ木小学校の卒業生の皆さんから目を輝かせながら、「先生が裏山の雑木林できのこ狩りに連れてってくれた」、「裏山は雑木林できのこがたくさんとれた」、「リスが校舎にやってきた」などと素敵な思い出話をうかがい、今ではスギやヒノキなど人工林に覆われた裏山を再び雑木林に復活させることはできないだろうかと考えました。



遠藤正久理事長

そこで、当時裏山の所有者だった星ふる学校「くまの木」監事の大島庄平さんに裏山の手入れをしたいという話をしました。最初はあまり良い返事がもらえませんでした。数年後には「山を貸しましょう」というてくれました。

次に活動に参加してくれる仲間を集めようと思い、団長の市川貴大さんから紹介された栃木県主催の「森づくり体験講座」（本誌12号参照）に参加したところ、多くの方の賛同を得て、2008年に「くまの木里山応援団」を立ち上げた時、呼びかけたほとんどの方が団員として登録してくれました。

最後に私の将来の夢についてお話します。現在では雑木林だった裏山の大部分がスギやヒノキといった人工林に覆われているわけですが、現在植栽されているスギやヒノキの人工林は荒廃することなく育林が継続されるとともに木材生産され、伐採後は広葉樹などの雑木林や草原などといった多様な森林環境が形成されている空間になっていけばいいなあと思います。多様な森林環境が形成された裏山は、多



「くまの木里山応援団」に参加する遠藤正久理事長

種多様な植物や動物が生育し、木材や落ち葉、きのこ、山菜などの収穫の場となり、また、季節の色彩等の景観が形成されるなど、地域内外の人々にやすらぎや癒しを提供してくれる場になることでしょう。ですから、地権者の皆様にご理解とご協力していただきながら、「くまの木里山応援団」も微力ながら多様な森林環境の形成のためのお手伝いが今後でもできればいいなあと思っています。

（農学博士、とちぎ農林倶楽部部長、
くまの木里山応援団団長
市川貴大）

剣ヶ峰(1540m)



矢板市

大間々台駐車場

○寺の在所

前山
(1435m)



9:30

ミツモチ(1248m)



○権現沢の名瀑



○イヌブナ自然林

8:00

○陸軍省境界線

守子神社



守子の池



登山口
(約800m)

7:30発

尚仁沢湧水



15:15着

★
終点

(土上平放牧場)

(約1050m)





～高 原 山～

高原山山開き登山ルート





星ふる学校「くまの木」 里山マップ

この看板が目印♪



立体地図も完成！



注意事項

・赤の実線が散策路です

- ・動植物の持出や持込はやめましょう
- ・ゴミは捨てずに持ち帰りましょう
- ・人と出会ったらあいさつしましょう
- ・気がついたことあれば事務局まで

作成：くまの木里山応援団

みんなの元気な森づくり支援事業の支援を受けて作成しました

星ふる学校「くまの木」とは？

星ふる学校「くまの木」は廃校(塩谷町旧熊ノ木小学校)が再整備された体験型宿泊施設の愛称です。宿泊業務、星空観察や農林業・加工体験等の体験活動等のほか、子供たち等に体験や交流の場を提供する活動や地域住民と共に地域の課題に向き合う活動などを実施しています。NPO法人により管理・運営を実施しています。



コナラ広場

落ち葉かきをしたり、どんぐりひろい、焼きいもなどの体験を行う場所です。(くまの木から徒歩15分程度)



広葉樹再生林

コナラやブナが植えられています。また、クヌギも植えました。(くまの木から徒歩15分程度)



体験林

枝打ち体験やつるはらい、除伐などの管理作業を行っています。(くまの木から徒歩15～30分程度)



朽の木坂

東熊ノ木地区ではここを通学路にして登校していました。頭上注意！(くまの木から徒歩15分程度)



くまの木里山応援団とは？

星ふる学校「くまの木」の裏山を整備し、多くの人が気軽に足を踏み入れ、自然とふれあうことができる、魅力的な「やすらぎの里山」を作ることなどを目的に、散策路の整備や看板作り、裏山の整備等を2008年2月から第3週の日曜日に実施しているボランティア集団です。また、公開活動として親子で森づくり体験も実施しています。



おわりに

里山より人里はなれたところを奥山といいますが、里山や奥山には、それぞれ人間生活に結びついた様々な森林利用の影響を受けている森林がひろがっています。その森林は、木材生産機能のほかに、水源かん養機能や生物多様性の保全、防災や保健・教育・文化機能などといった公益的機能を有しています。ところが、近年みられる森林管理の放棄は木材の安定供給はもとより、公益的機能の恩恵を受けられなくなりつつあることを示唆しています。森林の現状をまずは理解するとともに、周辺地域での適切な森林管理や本来のあるべき森林像を理解してから、みんなで保全・再生活動を行い、次世代に豊かな自然を継承していきましょう。



塩谷町落合橋付近から高原山を望む

別刷の作成にあたり、(株)井上総合印刷の井上光夫代表取締役をはじめ、雑誌「しもつけの心」の長嶋与欣編集長およびスタッフの皆様には格段のご配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。東日本大震災をうけ、日頃のライフスタイルを反省するとともに、人々とのつながりのありがたさを痛感いたしました。この別刷はこれまでお世話になった皆様への感謝の気持ちこめて作成いたしました。お世話になった皆様にご場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2011年5月15日 とちぎ農林倶楽部 市川貴大

(本別刷はとちぎ農村倶楽部ホームページ <http://www.geocities.jp/inkyodoctor3>)
にもPDFファイルにて掲載しています。